研究

魅せられて綴る藩文学（一）
藩学「四教堂」と先哲

勝間田　三千夫
（会員　佐伯市中村北町二―九）

一、はじめに

先ず佐伯藩政史の文化についてみると、全国三百諸藩の中でも殊に顕著とされる点についてみると、次のようである。

一に、官吏の任免

封建時代大樹の陰に立たされた藩侯は、支配権の下に於て官吏の任免は主権者の意志によって定められが、佐伯藩では、隣保扶助提携して責任を共にするという複数による五人組制度四十八ヶ條を制定して政治が行なわれた。

一に、国を治める制令

民を導くため、幕府に禁令があるように、それに従って法を立てた。藩祖毛利高政侯は慶長十一年（一六〇六）正月に「毛利高政の掟」を下した。それは農事に関する掟で、農作業を高率よく行なう内容のものであった。

一に、国を守る兵学

攻撃は最大の防禦、兵学に於ては「毛利高政の砲術」があった。高政は佐伯に入封する以前、かつて文禄征韓の役で軍艦として彼の地に渡り、家に伝わる焔魔王の大砲をもって武雄を誇った。のち慶長六年（一六〇一）佐伯に移封されて製造するようになった鉄砲は伊勢流と称され、佐伯藩の御家流として後世に伝えられた。

因に、この伊勢流を仙台藩伊達忠宗侯は、元和七年（一六二一）に教えを乞い、その奥儀を授けられたと伝えられている。世に「四海波の筒」で知られている。

一に、士民教養の学問

藩侯は、士民を指導する重責から、藩校を建て、学者を招聘して、その子弟を学ばせる。文部省日本教育資料

によれば、佐伯藩は諸藩の中でも、宝永元年(一七〇四)に学習所を設立されている。全国で四番目である。時の藩主は六代毛利高慶侯で、侯は文学を能くし、和歌の嗜があり、盛んな時の作品集に毛利高定歌集があり、その後の作品集に源林公御歌がある。この二書ともに参覲交代途上の作品が多く、事物を自然のままに詠まれている。

江戸中期ともなると、社会は安定して幕府の政治姿勢も緩やかに変化し、封建社会構造をもつ諸藩においても、上に倣らってその様相は変わっていった。長崎を開港し、明暦元年(一六五五)に相対貿易が行なわれるようになって、外国文化が入り、やがて、幕府の厳しい輸入禁制の中にあっても、僅かながらの書籍が輸入されるようになった。そして、半世紀のち、八代将軍吉宗公の享保年間に、直接キリシタン教義を説くもの以外の禁を緩める命令が出されたため、以後、時代と共に複雑な書籍輸入の手続きにも多少の改正が加えられて行き、その輸入量も多少ではあったが増えていった。

この享保年間が六代藩主高慶侯の最盛期であった。輸入書籍の購入には、江戸伺いをすることによって、求めることが出来るようになった。長崎に入港した種々の輸入品は、長崎奉行の検閲を経て江戸へ入ってゆき、幕府はもとより、江戸の士民にも大きく影響をもたらした。このことから、好学の高慶侯の治世に求められた奇書も相当数あったものと推察する。

次に、高慶侯の子や孫についてみると、高慶侯には四人の男子があった。中でも四男の裟は父に似てか学問を能くし、安永・天明年間の世に、扶揺公子また毛利壷邸の名で知られた人物である。(以下、佐伯史談一五五号参照)。

裟には、かつて裟が水戸藩家老山野辺兵庫頭義胤の養嗣子になった時、山野辺家で生まれた一男があった。幼名を嬰という。嬰もまた学を能くした。若干にして文藻に優れ、安永から天明にかけては長孺公子で知られた。後天明五年、二十五歳で瀧川家十一代頭主になってからも、学問の道を捨てることなく、益々盛んに勉励され、松平定信が老中となった天明七年、徳川は儒学を治国の要諦とし、教養の信条として詩文には餘力主義をもっていたころ、諸侯の間ではすでに詩文が盛んになっていた。友野瑛が出版した熈朝詩萫集には諸侯六十五家の詩

文が収められていて、その中には毛利嬰の作品十一首が載っている。また、安文仲の刪定された嚮風草にも毛利嬰の詩文七言律以下三十首が収められている。このように徳川氏の餘力の陰に諸侯の学問はすゝみ、よって老中松平定信は、寛政二年に官学を一本化するため、儒学は朱子学に統一し、他を廃すという異学禁制を断行した。

この松平定信ともっとも関わりの深かったのは、後述する八代高標侯であった。高標侯と瀧川利雍(嬰)は共に佐伯藩毛利氏の血族であり、学問においては切瑳の中にあった。

因に、佐伯藩主の江戸邸における学問は、荻生徂徠の護園学派に嘱し、その流れを汲む儒者に師事された。(佐伯史談第一七六号参照)

毛利嬰は、後に擒藻公子と称し、諸国大名で結社される風月社の文壇にその名を留めている。

かくして、佐伯藩の文学は、時世の流れの中で高慶侯の学問と教育愛の深さが土台をなし、四男裘が江戸地に開花し、また、その子嬰も父に比肩して諸大名の中に名声を高めてゆき、佐伯藩主毛利一統の学問が世に知らしめられた。

かゝる時世の中、六代高慶侯の遺業を後継したのが八代高標侯であった。高標侯は、六歳(宝暦十年)にして、父高丘侯(七代藩主)の遺領をつぎ、藩儒矢野黙齋に師事して学を修めた。若干にしてその学才は先覚を凌ぐほどに進み、のちに、先見の明あってか学問の重要性を説き、安永六年(一七七七)十七歳のとき、かつての学習所を整備して、藩立学校の創設を図り、四教堂と改称した。ペン(文)は剣(武)より強し、と学問の改革を図った。高標侯はまた、先覚を超えて愛書家であった。将軍家治公となった宝暦年から輸入書籍は次第に増え、江戸地には溢れる程になった。高標侯は時をゆるめず、侍臣を長崎に遣り、舶載の珍書奇書を購い求めた。天明元年、二十七歳の時、城中に佐伯文庫を開設した。時の蔵書数は世に八萬本(冊)とも言われているが、たゞ内外の万巻の書籍があったことは否定できない。なお、その利用にあたっては、藩士子弟にとゞまらず好学の者には広く閲覧が許されていた。

愛書家随一と言われた高標侯には、佐伯文庫本とは別に貴重な宝典があり、蒐集した内外の書籍の中には特筆に値する典籍があった。(略)

寛政二年(一七九〇)高標侯三十六歳の時、寛政異学の禁を断行した老中松平定信は、高標侯三十六歳の時、寛政異学の禁を断行した老中松平定信は、高標侯とは学侶の中にあって、松平定信曰く、佐伯侯の蔵書には絶品あり、と高く評価された。また、諸国大名からも羨望された。

寛政六年(一七九四)高標侯四十歳。

幕府はこの年、書籍輸入に関して一つの変化をもたらした。従来は船主財主などが「本方売物」以外に持渡った書籍は「別段売物」として目録を作成せず、江戸に伺うことなく売捌っていたものを、この年以後は「別段売物」も「本方売物」と同様に江戸伺いをすることになった。

よって、高標侯が舶来の書籍購入を積極的に行なったのもこの時までゞ、その後にも購入はされたと思われるが、希少価値の高い書籍は長崎では求められなかった。寧ろ、著作に勢出され、自らの著書「雅衍」二十二巻は特筆に値する。

高標侯は、この年、藩儒に久留米の元藩臣松下筑陰を登用された。四年前の寛政二年に、侯の育英の師であった碩儒矢野黙斎が高齢のため致仕し、その後藩学は停滞ぎみとなり、再び気運を高めんと、諸国に碩儒なる人物を求めていたとき、日田に滞留中の松下西洋なる浪人の名声を聴き、聘して佐伯藩に解褐させて藩儒にとりたてた。侯も自から学を極めんと侍講に、また、藩学「四教堂」の主座に、藩文学の充実が図られていった。

かくして、文化文政時代、文物隆盛を極めるころ、藩学「四教堂」も最盛期に達した。

大地(四教堂)に木(諸生)は育つ、四教堂に英才教育を授けられた諸生たち、中には、藩費を給されて私塾に、また官学(昌平校)に学んだ諸生、それは、藩が後継者育成のため、学資を支給して諸国へ、また官学へ遊学させる道を開いていたことによるものであった。藩はまた、能力優秀な諸生には私塾を開校させて、藩士の子弟に学問の基礎教育を施こさしめるなど、その皆藩士教育の足跡には藩主の学問にかけた情熱が伺える。

以上、佐伯藩の文化史は、主としてかゝるところにあった。幕藩体制下に、ともに歩んだ諸侯の中でも、佐伯藩二万石は外様大名が領するところであり、幕府に服従して忠勤に励みながら、藩政に力を傾注した歴代藩

主、そして左右の手となった家臣たち、天明の時代をむかえて漸く陽のめを見ることができた。それは、学問への夜明けであった。

此度、表題のサブタイトルに魅せられて綴る藩文学、としたのは歴代の好学藩主に侍講し、また、藩学「四教堂」に自らの哲学を授けた儒官の功績を称え、その足跡を世に傳え、郷土の誇り高い文化として語りつがれゝばと筆をとった次第である。どうか筆者の浅学の弱さは、読者諸氏の豊かな感性をもって補っていたゞければ幸である。

(注)本書執筆にあたっての参考文献等は、本連載完結をもって完末に一括掲載する。

二、官学と藩学

老中松平定信が寛政の改革を断行したひとつに学制の改革があった。

それは最も中央にあって、武士団の風紀粛正と使命感を復活させ、指導者としての能力を養うことを重視して行なわれたものであり、それが、文武奨励のかたちで大きく取りあげられた。

これまで林家が管理していた聖堂は、寛政二年(一七九〇)の異学の禁制により、同四年に幕府直轄の経営するところとなった。そして八年後の寛政十二年(一八〇〇)に到って聖学(昌平坂学問所)昌平黌が落成した。これより、官学は朱子学に統一され、朱子学を学んだ者でなければ幕府の官途にはつけないとする改革であった。その事は諸藩に大きく影響を与えた。藩の中には、上の官学に下これに倣らい、と、藩校のすゝむべき道を左右選択した藩も少なくなかった。

藩校は、その古き時代には、文武両道の修業の場ではなく、単に学問のみの修業所にすぎなかった。が、幕府のこの両道の根基により、藩校もために、藩立学校として制度化し、組織を整え、その教育内容に於ては文武両道にわたって藩士及びその子弟を教育する学校教育の実現に向わしめた。

また、天下泰平と言われる世にあっては、武士の姿が節義奉公の道となり、それが武道という型で教育的背景の内に取り込まれ、巳を精神修養する道となった。

かくして、藩校は学問に四書五経などの経書を中心にした漢学を修めることを本旨とし、武道には剣術・弓

術・槍術・砲術・水連等の武芸種目を修めることを本旨とした。しかし、身分・役職によって修める種目が異なっていた。兵学は身分の高い中士以上の子弟が学ぶものとされていた。

江戸時代も幕末になるに連れて、両道も新たな科目が採用されるに至り、諸藩はそれぞれに特色ある学風によって、人材を陶冶育成した。

藩校に学ぶ入学年齢についてみると、大多数の藩で、七・八歳となっていた。初めに、読み書の初歩的学習をして、基礎的経典の素読を行ない、十歳頃から漢学に接する。完璧を期すため、一日に進む分量は厳重に制限され、四・五字からなる一節を反復的に行なうことを旨としていた。大多数の教師は、丸暗記こそ望まれる完璧さの極致だと、これが終生身についてはなれない真の学問であると説いている。十四・五歳までは素読以外の教育を与えてはならないとされていて、四書五経全部を機械的反復法に従って読み終るまで、その内容については一切知的考察は許されなかったことが一般的であった。しかし、優秀な子弟には、十一・二歳までに、より高度な課程に進む道が開かれていた。

漢学も江戸初期においては、中国語がすべての知識に通ずる唯一の道だとして、儒教の経典がその中核をなし、必修科目となっていた。基礎的な素読を終ると教材の意味を学び始め、最初は四書の一つか、宋儒の道徳講話の「小学」を学んだ。次に原典の大意を伝える目的で講釈を行なう教師もあった。講釈は自習を補なう意味もあって、月に三、四回行なわれた。

しかし、講釈よりも重要視されたのは会読と輪講であった。会読の場合は単純な朗読であり、輪講の場合は予習した一節の解釈から始まり、生徒同士の討論を自由に展開させ、意味の一致をみるころ、教師が初めて口をはさみ、必要に応じて誤りを正す。という方針を意識的に採っていた。

また、十四・五歳で文学修業を終え、なお能力ある生徒は続けて二十歳までの間に藩学を去るのが多くの藩の慣例であった。しかし、能力ある者は藩にとゞまらず、他国の私塾へ、また、藩費で官学を目指して遊学するものも少なくなかった。

以上、官学は幕府直轄の経営で左右されるのであるが、藩学は各藩の独自性によるものであって、幕府の命

によるものではない。が、しいて挙げれば、武の心得は藩の心得であるだけに必須の条件であろう。従って、佐伯藩の学制はどうであったか、次にみること、とする。

三、藩校「四教堂」と学制

前述のように、佐伯藩校「四教堂」は、安永六年（一七七七）に設立されたのであるが、その経緯をみると元禄に遡る。元禄十二年（一六九九）に襲封した六代藩主毛利周防守高慶侯が儒学を尊崇して宝永元年（一七〇四）三月、在国に学習所を設け、文武を奨励し、藩士・子弟に教育を施したことに起源する。

高慶侯は豊後森藩主第三代久留島通清の五男として、延宝三年（一六七五）四月豊後森に生まれた。元禄元年（一六八八）七月二十七日、実兄高久（佐伯藩五代藩主）の養継子となった。

高慶侯は初名を高定といい、元禄二年十二月二十七日、十五歳のとき従五位下周防守に叙任されて、同四年六月奥詰にのぼり、同七年二月まで御小姓・奥詰をくり返し官府に勤めた。

元禄十二年五月十三日、二十四歳で家督を継ぎ、佐伯藩六代藩主となって藩政を司どった。その一代の偉業には顕著なものがあった。なおその偉業を後継したのが八代高標侯である。高標侯は天資英邁、夙に学を好み、能く心を藩政に用い、諸方面にその治績をみるべきもの多く、殊に教育に関する業績は特筆に値している。

高標侯は二十三歳のとき、学事を拡張せんとして、大叔父毛利壷邱（扶揺公子）の旧宅を一大改築し、学舎を「四教堂」と名称して、教授に該博卓見で知られた矢野黙斎と、山本七兵衛を挙げ、各々三人扶持を与えて、教育に従事せしめ、学規・学則を僅かに備えて、常に文武両道を説き家臣の修業を督励した。しかし、矢野黙斎は高齢のため、多く勤めることなく致仕した。その後継に、寛政二年（一七九〇）十月、古田節右衛門が藩校博士教授に登用され、また、寛政六年（一七九四）の春には、筑後久留米藩（元藩士）松下筑陰（日田広瀬家寓中）を招聘し、給人格をもって儒官にとりたてた。筑陰は藩主及び士大夫のために月並講釈を行ない、また、四教堂の祭酒（校長）となって学制を整え、教学振興を図り古田節右衛門と共に諸生を教導し、よって、その学風は大いに振張し、藩学興隆の気運が開かれた。

古田節右衛門は藩に仕えること享和三年（一八〇三）までの十三年間、藩校の総監として学事に執務し、また、松下筑陰は藩侯二代に仕え、四教堂に教鞭を執ること十六年、二教授の風尚は藩士・子弟に影響を与え、文化文政・天保にかけて文物隆盛を極めるころ、佐伯藩校からも偉大なる人材が輩出されたのである。

その後、儒官に登用されたのは、関三左衛門、佐野渡、中島大賚（子玉・米華）、高妻士直（芳州）、秋月橘門（水筑小相）、楠文蔚（蕉窓）、秋月士新（必山）らであった。

かくして、藩校「四教堂」は藩文学の淵源として、安永六年創設以来、明治四年の封土奉還に至るまで、実に九十五年間、その隆盛を極めながら以て閉校された。

◆『村の大木 ―ふるさとの自然を大切にしよう』

米水津の歴史を知る会
米水津村教育委員会
平成十一年三月刊　B5判　一二八頁

本書は「米水津の歴史を知る会」が六年の歳月をかけて、村に残されている大木を調査してまとめたもの。

「村の大木」発刊の序文に「地域の山川草木を愛することは、村を愛することにつながります。会員皆の〝故郷の自然を大切にしよう〟という思いが、この調査になりました」と、調査の動機とその意義について述べている。

また、この調査結果を多くの人に知ってもらうことと、会の結成十五周年を記念して発刊している。

本書の特色ともいうべきは、①すばらしいカラー写真の美しさ、その迫真力、②大木を通して村の歴史の一端を知ることができるということ―これは自然を愛することにつながる。米水津村の、浦々の人たちの自然に対するやさしい思いが本書を読んで感じられる。

また、紹介された村内の六四本の大木の場所・樹高・幹周が記録され、大木の「所在地分布図」もあり便利である。（矢野）